



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

太陽を超越する ‘ Lady ’ : キャサリン・フィリップスによるジョン・ダンの奇想改変

著者	竹山 友子
雑誌名	人文論究
巻	70
号	3
ページ	89-109
発行年	2020-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029154

太陽を超越する ‘Lady’

——キャサリン・フィリップスによるジョン・ダンの奇想改変——

竹 山 友 子

1. はじめに

キャサリン・フィリップス（**Katherine Philips**）は1632年にロンドンで生まれ、清教徒および議会派と深く繋がる家柄の出身である。8歳で清教徒の寄宿舎に入ったが、そこで王党派に繋がる友人たちと親しくなったと言われる。母の再婚により15歳でウェールズに移り、16歳で義理の父親の親戚にあたるジェイムズ・フィリップスと結婚した。実家も夫も議会派だったが、彼女自身は寄宿舎生活で出会った友人たちとの縁で、王党派や貴族とも親交があった。1640年代後半から天然痘で亡くなる1664年まで執筆活動を続け、彼女自身は“our Society”⁽¹⁾と呼んだいわゆる **society of friendship**（友愛会）となる文学サークルを主宰し、そのサークル内で自分自身を **Orinda** と称し、会員である友人たちに各々別名を授けた（**Loscocco** “Introductory” ix-xi）。フィリップスの詩のほとんどは友人や知人についてフィリップス自身が一人称の語り手となって語るものであり、中でも自ら名を授けた女性たちとの友情を謳う詩群が有名である。詩の作風については、現在フィリップスは形而上詩人の一人に数えられており、ジョン・ダンの奇想の影響を受けているとされ、ポーラ・ロスッコ（**Paula Loscocco**）は「フィリップスはダンの最後にして最良の後継者」と述べている（“Inventing” 158）。本稿ではダンとフィリップスの共通点を語る際に、これまで深く論じられることのなかった太陽に焦点を当てる⁽²⁾。フィリップスが親友ルーケシア（**Lucasia**）について謳った詩群に

見られる太陽を用いた奇想にダンの *Songs and Sonnets* からの影響と改変が伺えることと、その比較分析から導き出したフィリップスの別の詩における新たな見解 – “An Answer to another perswading a Lady to Marriage” もルーケイシアに向けた詩であること – を提示する。

2. ジョン・ダンのコンパスの奇想と キャサリン・フィリップスによる改変

フィリップスがダンの後継者とみなされる理由の一つとなった詩は “Friendship in Emblem, or the Seal. To my dearest *Lucasia*” である。これはダンの “A Valediction: forbidding Mourning” におけるコンパスの奇想を利用したものと思われる。ダンの詩では男性話者が “If they [our two souls] be two, they are two so / As stiff twin compasses are two” (25-26) と述べるように、自分とその恋人の二つの魂をコンパスの二本の脚に例える⁽³⁾。しかしその描写では、恋人の魂は中心に固定された脚とされ、その脚（つまり女性の魂）はもう一方の脚である男性話者の魂の動きに合わせて動く (Hobby 138)。

Thy soul the fixed foot, makes no show

To move, but doth, if th’ other do.

And though it in the centre sit,

Yet when the other far doth roam,

It leans, and hearkens after it,

And grows erect, as that comes home.

Such wilt thou be to me, who must

Like th’ other foot, obliquely run ;

Thy firmness makes my circle just,

And makes me end, where I begun. (27-36, underlines mine)

最終連では、女性が不動なら話者が描く円は“just”「正確な」あるいは「正当な」ものになると述べて、女性が不動であることを正当化し、男女の役割を固定化する。

一方、フィリップスの “Friendship in Emblem, or the Seal. To my dearest *Lucasia*” においても話者と友人ルーケイシアの関係をダンと同じようにコンパスの脚に例えている。ダンがコンパスの奇想によって示した話者と恋人の関係を、フィリップスは同性の友人との関係に置き換える。

The Compasses that stand above

Express this great immortal Love ;

For Friends, like them, can prove this true,

They are, and yet they are not, two.

And in their posture is exprest

Friendship’s exalted Interest :

Each follows where the other leans,

And what each does, this other means.

And as when one foot does stand fast,

And t’other circles seeks to cast,

The steddy part does regulate

And make the wandrer’s motion straight :

(21-32, underlines mine)⁽⁴⁾

ルーケイシアとはフィリップスが自分の親しい友人アン・オーウェン (Anne

Owen) に付けた名である。彼女との友情を描くこの詩において、フィリップスはダンのコンパスの奇想を利用しつつも、その描写はダンが描く男女関係とは性質を異にする。フィリップスの場合もダン同様に一方の脚がもう一方の脚の動きに合わせ、一方が固定しているときにもう一方が円を描こうとすると語るが、それぞれを “Each” と “the other (27)”, “each” と “this other” (28), “one foot” (29) と “t’other” (30) と表すように、どちらがフィリップスでどちらがルーケイシアかを指定しない。このことにより、ダンの男女関係とは違ってフィリップスの女同士の友情は、二人の役割が固定されず流動的であることが示される (Hobby 139; Loscocco “Inventing” 160-72)。男女関係を描くダンの奇想を利用して、二人の女性間の平等な関係や女性同士の愛情を表している。このようにフィリップスはダンの奇想を利用する。そして、ルーケイシア詩群においてはダンの恋愛詩 *Songs and Sonnets* に見られる太陽 (Sun) のイメージを利用した表現が特徴的である。

3. ジョン・ダンの *Songs and Sonnets* における太陽

まず、ダンが *Songs and Sonnets* の恋愛詩で用いた太陽のイメージを考察する。一般的に太陽は万物を照らすもの、あるいは宗教的には神またはキリストの表象として用いられることが多いが、ダンの *Songs and Sonnets* の恋愛詩における太陽は否定的なイメージが先行する⁽⁵⁾。そしてそのイメージには次の三つの特徴がある。第一に「太陽の地位低下」、第二に「侵入者・監視者としての太陽」、第三に「閉じ込められない太陽」である。いずれもダンのパラドックスを展開する重要な特徴として機能する。

第一の「太陽の地位低下」と第二の「侵入者・監視者としての太陽」は “The Sun Rising” で描かれる。

Busy old fool, unruly sun,

Why dost thou thus,

Through windows, and through curtains call on us?

Must to thy motions lovers' season run? (1-4)

Thy beams, so reverend, and strong

Why shouldst thou think?

I could eclipse and cloud them with a wink,

But that I would not lose her sight so long : (11-14, underlines mine)

詩の冒頭で男性話者は太陽に「忙しない老いぼれの愚か者、手に負えない太陽」と太陽を貶める呼びかけをし、なぜ窓を通して自分と恋人のもとを訪れて目覚めさせるのかと非難する。この描写により、太陽が恋人たちの至福の眠りを妨げる侵入者として否定的な意味合いを持つことが明らかとなる⁽⁶⁾。しかしその一方で、話者は13行および14行目で、自分が瞬きさえすればその光を隠すこともできるが、彼女を見失いたくないからそうしないだけなのだと語って太陽に対して挑戦的な態度を示す。さらに太陽を貶める話者の試みは“Thou sun art half as happy as we, / In that [us] the world's contracted thus;” (25-26) と続く。*Oxford English Dictionary* によると“contract”には17世紀の用法で“collect, concentrate, combine in one”の意味もあるため(“contract” v., 7.a), この発言の訳は「世界が僕たちの中に“収斂”されているので、太陽であるお前の幸せは僕らの半分にしかならない」となり、太陽の地位を低下させる働きを持つ。早乙女は太陽を貶める表現について「太陽に対する挑戦はダンにとっては不変項」で「愛によって対峙しようとする」と述べる(26-27)。しかし、この男性話者の太陽の地位低下を狙う試みは成功しているとは言えない。なぜなら、話者は太陽を手にも負えない侵入者とみなす一方で、本来なら自分は太陽を支配することもできると主張するのだが、その言葉は仮定法を用いた表現のために現実性は限りなく低いと思われる。ダンの話者による太陽を貶める試みは、侵入者としての太陽の優位性と太陽に支配される恋人たちの姿を露呈し、その結果人間を支配する「侵入者・監視者とし

ての太陽」を強調するパラドックスとなるのである。

“The Sun Rising” と対をなすとされる詩 “Break of Day” でも「太陽の地位低下」「侵入者・監視者としての太陽」が表されている。この詩では女性話者が恋人との時間を遮る夜明けを嘆く。

'Tis true, 'tis day, what though it be?
 O wilt thou therefore rise from me?
 Why should we rise, because 'tis light?
 Did we lie down, because 'twas night?
 Love which in spite of darkness brought us hither,
 Should in despite of light keep us together.

Light hath no tongue, but is all eye ;
If it could speak as well as spy,
 This were the worst, that it could say,
 That being well, I fain would stay,
 And that I loved my heart and honour so,
 That I would not from him, that had them, go.

Must business thee from hence remove?
 Oh, that's the worst disease of love (1-14, underlines mine)

女性話者は恋人に対して「どうして起きないといけないの、朝日だから？」(3) と言って、夜明けによって恋人との至福の眠りが妨げられることを嘆き、朝日つまり太陽を “The Sun Rising” と同じように「侵入者」とみなす。さらに太陽は “all eye” (7) であり, “spy” (8) の語によって、自分と恋人との関係を知り得る「監視者」と女性話者がみなしていることがわかる。しかし同時に「あら本当、朝が来たわ、それが何だと言うの？」(1) および「話せ

たとしても／言えるのはせいぜいこんなこと」(8-9) など太陽を軽視する発言をする。その一方で、女性はその自ら貶めた太陽の口を借りて「私はベッドにいたい、大切にしていた自分の心と操を捧げた人から離れたくない」(10-12) と告げ、貶めたはずの太陽の力を借りて恋人が出かけるのを阻止しようとするパラドックスを展開する。第三連では愛にとっての最悪の病気は “business” (13) だと女性話者は主張するが、“The Sun Rising” と同様に “Break of Day” においても、太陽は恋人たちにとって幸せをもたらす肯定的なものではなく、むしろ「侵入者・監視者」として至福の状態を無情にも打ち切り、人間を支配するものとして描かれている。太陽の地位低下を狙う試みは結局人間を支配する「侵入者・監視者としての太陽」を強調するパラドックスとして機能するだけなのである。

第三の特徴である「閉じ込められない、制限されない太陽」については、女性話者が当時の女性観に異議を唱える内容の “Confined Love” で表される。話者は女性の自由な恋愛を太陽や星の光になぞらえて正当化する。

Some man unworthy to be possessor
 Of old or new love, himself being false or weak,
 Thought his pain and shame would be lesser,
 If on womankind he might his anger wreak,
 And thence a law did grow,
One should but one man know ;
 But are other creatures so?

Are sun, moon, or stars by law forbidden,
To smile where they list, or lend away their light?

Who e'er rigged fair ship to lie in harbours,
 And not to seek new lands, or not to deal withal?

Or built fair houses, set trees, and harbours,
 Only to lock up, or else to let them fall?
 Good is not good, unless
 A thousand it possess,
 But doth waste with greediness. (1-9, 15-21, underlines mine)

第一連で語られる「女が関係を持てるのは一人の男のみ」という当時の女性の貞節に関する規定に女性話者が疑問を呈し、最終的にはタイトルでもある“**Confined Love**”「制限された愛」を否定するために様々な例を出して反論する⁽⁷⁾。その一つが太陽である。「太陽や月や星たちが、好きなところで微笑んだり光を投げかけるのを、法律で禁じられていますか」(8-9)と訴えて、女性を太陽、月、星に、女性の愛情を太陽などが放つ光に例えながら、太陽や月や星が好きなところに光を注ぐように女性も好きなところに愛を注いでもよいと主張する。

この詩は太陽や星、鳥や獣などの自由な行動を示すことで、女性の自由を主張するものであるが、最終的には“**Song: Go, and catch a falling star**”や“**Woman’s Constancy**”などの詩で表される当時のもう一つの女性観－女性に移り気で浮気性－を強調してタイトルの **Confined Love**「制限された愛」を支持するパラドックスとなっている⁽⁸⁾。その比較対象となる太陽の特徴が、“**confine**”や“**lock up**”(18)とは無縁の「閉じ込められず、制限されない」ことであるが、ダンがこの太陽の特徴を、女性を貶めるパラドックスを展開する道具として用いていることは注目に値する。

4. キャサリン・フィリップスのルーケイシア詩群における太陽

この章ではフィリップスが親友であるアン・オーウェン別名ルーケイシアについて書いた詩群の中から、ダンの太陽のイメージを利用したと思われる詩を考察し、その類似点と相違点を指摘する。ルーケイシア (**Lucasia**) の名はラ

テン語で光の地から来た者／光を与える者 (Lucas) に由来すると考えられるが, “Lucasia” というタイトルの詩では “So she [Lucasia] now light, and then does light dispence, / But is one shining Orb of Excellence” (31-32) となるように, その名の通りルーケイシアは周囲にまばゆい光を発する卓越した光る球体に例えられている⁽⁹⁾。

また, “Orinda to Lucasia” という詩においては, ダンの手法と同じようにルーケイシアを称揚するために太陽を貶める表現が使われる。

Observe the weary birds e're night be done,
How they would fain call up the tardy Sun,
With Feathers hung with dew,
And trembling voices too.
They court their glorious Planet to appear,
That they may find recruits of spirits there.

.

While Brooks more bold and fierce than they,
Wanting those beams, from whence
All things drink influence,
Openly murmur and demand the day.

Thou my *Lucasia* art far more to me,
Than he to all the under-world can be ;
From thee I've heat and light,
Thy absence makes my night. (1-6, 9-16, underlines mine)

この詩では太陽を “the tardy Sun” (2) 「のろまな太陽」と呼ぶが, それはダンが “The Sun Rising” で “Busy old fool, unruly sun” (1) 「おせっかいで愚かな老人, 手に負えない太陽よ」と言って太陽を貶めて地位低下を狙う表

現を用いたことを想起させる。その後 “their glorious Planet” (5) 「輝かしい天球」と言い換えることで一転して太陽が称揚されているように感じられるが, “the” でも “our” でもなく “their” という語を伴うことにより, あくまでも「彼ら鳥たち」にとつての “glorious Planet” であることを暗示させる。そして二連目冒頭でオリンダにとつてのルーケイシアは地球にとつての太陽以上で, “From thee I’ve heat and light” (15) と述べてルーケイシアは光とともに情熱 (heat) あるいは体温 (vital heat) を与える存在だと主張する⁽¹⁰⁾。そのように太陽との対比でルーケイシアを称揚することで, 太陽の地位を貶めている。

さらに, “A Dialogue of Friendship multiplyed” では女性同士の愛が太陽と比較されて, 結果的に太陽は下位に貶められる。この詩はミュージドラスとオリンダ (つまりフィリップス) の対話形式で, 愛を特定の人物だけに限定する (“confine”) ことの是非を問うものである。

Musidorus. Will you unto one single sense
 Confine a starry Influence?
 Or when you the raies combine,
 To themselves only make them shine? (1-4)

Orinda. Union in raies does not confine,
But doubles lustre when they shine,
 And souls united live above
 Envy, as much as scattered Lover⁽¹¹⁾ [.]
 Friendship (like Rivers) as it multiplies,
 In many streams, grows weaker still and dies.
 (9-14, underlines mine)

Musidorus. But Friendship’s made of purest fire,

Which burns and keeps its stock entire.
 Love, like the Sun, may shed his beams on all,
 And grow more great by being general. (19-22)

Orinda. Love like the Sun does all inspire,
 But burns most by contracted fire.
 Then though I honour every worthy guest,
 Yet my *Lucasia* only rules my breast.
 (27-30, underline mine)

オリンダの語る愛とはオリンダとルーケイシアの女性同士の友愛で、それは光に満ちた結合であり、輝きを「閉じ込めず」(“not confine”)二倍にするのだとオリンダは主張する(9-10)。ミュージドーラスは、太陽のように愛は万物を照らす、普遍的になること、つまり相手を特定しないことによってもっと偉大になるのだとして普遍的な愛を主張する(21-22)。それに対してオリンダは、友愛は太陽のように万物に息吹を与えるが、「収斂された炎」(“contracted fire”)によって最大限に燃えるのだと反論する(28)。

オリンダつまりフィリップスによる太陽のイメージを利用した友愛の描写は、ダンの詩における太陽のイメージを反映していると思われる。この詩においては太陽が女性同士の友愛の比較対象として用いられるが、最終的に友愛が太陽に勝り太陽の地位は低下する。万物を照らすことにおいては太陽と友愛は同じだが、友愛はさらに「収斂された炎によって最大限に燃える」(28)のである。友愛が太陽より上に位置付けられる理由が「収斂された炎」(“contracted fire”)であり、これはダンによる“The Sun Rising”の男性話者が用いた“contracted”(26)の語と響きあう。“The Sun Rising”の話者は、太陽より自分たちが幸せである理由を“In that [us] the world’s contracted”(26)「世界が僕たちの中に収斂されている」とする。ダンの詩においてもフィリップスの詩においても、“contract [ed]”の語は太陽の地位を低下させる

働きを持つのである。

さらにフィリップスは、友愛が持つ光は特定の人物を対象とすることでその輝きを閉じ込めず（“not confine”）「収斂された炎」にして一層強くするが、対象を特定しない愛は「ばら撒かれた愛」“scattered Lover”（12）となり、多くの支流を持つ川のように、次第に弱くなり最後は消滅すると主張する（13-14）。特定の人物を対象とする節度ある愛は、一見自由な不特定多数を相手とする愛よりも本物の強さと自由を生み出すというパラドックスである。これは、ダンが“Confined Love”で明らかにした節度のない愛が結果的に女性の貞節への不信を招き、愛を閉じ込めてしまうというパラドックスをジェンダー的に反転させた論と言えよう。

太陽の地位を低下させる表現は、フィリップスがルーケイシアという名を授けたことを記念して書いた詩 “To the Excellent Mrs. Anne Owen, upon her receiving the name of *Lucasia*, and adoption into our Society, December 28. 1651” でも見られる。この詩においてもルーケイシアは太陽を超越する存在として描かれる。

We are compleat, and Fate hath now
No greater blessing to bestow :
Nay the dull World must now confess
We have all worth, all happiness.
Annals of State are trifles to our fame,
Now 'tis made sacred by *Lucasia*'s name.

But as though through a Burning-glass
The Sun more vigorous doth pass,
Yet still with general freedom shines ;
For that contracts, but not confines :
So though by this her beams are fixed here,

Yet she diffuses glory every where.

Her Mind is so entirely bright,
The splendor would but wound our sight,
And must to some disguise submit,
Or we could never worship it.
And we by this relation are allow'd
Lustre enough to be *Lucasia's* Cloud.

Nations will own us now to be
A Temple of Divinity ;
And Pilgrims shall ten Ages hence
Approach our Tombs with reverence.
May then that time which did such bliss convey
Be kept by us perpetual Holy-day. (underlines mine)

この詩において注目すべきは「天日取りレンズ」「*Burning-glass*」(7)の存在である⁽¹²⁾。エリザベス・スコット＝バウマン (*Elizabeth Scott-Baumann*) はこの詩に関して「フィリップスにとって太陽は愛する友人のエンブレムである」(123)と述べるが、ルーケイシアと比較される太陽はありのままの自然な太陽ではなく、「天日取りレンズ」を通して力強さを増した太陽である。つまり、ルーケイシアは自然のままの太陽に対して勝る存在なのである。その際に用いられる語が先述した「収斂」(“*contract*”)の語である。太陽とルーケイシアの比較において話者であるフィリップスは、「なぜなら天日取りレンズは太陽光を集約しても、閉じ込めないから。／そのようにこの新しい名によって彼女の光はここ(友愛会)に定着しますが、／それでも彼女はあらゆるところで栄光を放つのです」(10-12)と述べる。ダンの“The Sun Rising”やフィリップス自身の“A Dialogue of Friendship multiplied”における“con-

tracted fire” (28) と同じように、この詩においても「収斂する」(“contract”) という語は自然のままの太陽を上回る力を生じさせ、結果的に太陽を下位に貶める役割を果たす。光を「収斂する」(“contract”) が「閉じ込めない」(“not confine”) という逆説的な働きを持つ天日取りレンズによって太陽光はさらに強力になり、制限のない一層自由な光になる⁽¹³⁾。同じようにルーケイシアは「固定された」(“fixed”) 状態でも閉じ込められずに「至るところで」(“every where”) 栄光の光を放つ、つまりフィリップスが主宰する友愛会のメンバーに固定されることで、むしろ家庭や社会の規範に閉じ込められない、しかし節度ある愛情を持った女性になるのである。

この理想的なしかし逆説的な状況を生み出す「天日取りレンズ」(“burning glass”) という近代科学の実用品は、ダンの詩が封じ込めに失敗した「侵入者・監視者として人間を支配する太陽」を「監視者である人間が支配する太陽」へと反転させる。ダンの恋愛詩における「太陽の地位低下」「侵入者・監視者としての太陽」「閉じ込められない太陽」のイメージおよびその際に用いられる語句、そしてそのパラドックスの技法を、フィリップスは女性同士の友情を謳う詩で巧みに利用する。そしてダンの詩においては失敗に終わる太陽の地位低下を狙う試み、太陽を支配する試みに、フィリップスの詩は太陽光を “contracts, but not confines” (10) 「閉じ込めないが収斂する」ことによってさらに強い光を生み出す近代科学の実用品を用いて成功するのである。

5. フィリップスによるダンの手法のさらなる応用と新たな見解

これまでの章では、フィリップスのルーケイシア詩群においてダンの *Songs and Sonnets* の恋愛詩における太陽の奇想が利用され、巧みに改変されていることを考察した。これらの結果を考慮すると、ルーケイシア詩群には含まれない “An Answer to another perswading a Lady to Marriage” もダンの太陽の奇想の影響を強く受けていると思われる。この詩の内容は、ある婦人に求婚する詩を書いたと思われる男性への反論・異議申し立てである。

Forbear bold Youth, all’s Heaven here,

And what you do aver,

To others Courtship may appear,

’Tis Sacriledge to her.

She is a publick Deity,

And were’t not very odd

She should depose her self to be

A petty Household God?

First make the Sun in private shine,

And bid the World adieu,

That so he may his beams confine

In complement to you.

But if of that do despair,

Think how you did amiss,

To strive to fix her beams which are

More bright and large than this. (underlines mine)

フィリップスと思われる話者は冒頭から男性を「厚かましい若者よ、慎みなさい」(1)と命令口調で諫める。そして若者の求愛行為を“publick Deity”(5)「公の神」である Lady に対する冒涇だと非難する。さらに第三連では若者に対して Lady を手に入れる条件を述べるが、それは「太陽をこっそりと輝かせ、世界に別れを告げさせ、太陽の光を自分だけに閉じ込める(“confine”)こと」である。言い換えると、太陽を自分の意のままに支配することができて初めて Lady に求婚できるのである。これはダンの“The Sun Rising”や“Break of Day”で示された人間を支配する「侵入者・監視者としての太陽」

や “Confined Love” で表された「閉じ込められない太陽」のイメージを逆手に取った主張と思われる。特に “The Sun Rising” において、実際には太陽を支配することができないのに仮定法を用いて「瞬き一つで太陽の光を覆い隠すこともできる」(13) と豪語する男性話者への皮肉となる。

そして最終連で「太陽よりも明るく豊かな彼女の光を留め (“fix”) ようと奮闘する」ことは「過ち」であると述べて、自然の太陽を貶めて Lady が太陽を超越する存在であると主張する。異性愛を語るダンの “The Sun Rising” や “Break of Day” における太陽のイメージを利用して、そしてその太陽を貶める試み、太陽を支配する試みの失敗が露呈される表現を逆手にとって、太陽を支配できない男性に太陽を超越する存在の女性を支配することは不可能であること、女性同士の友情関係が恋愛関係よりも上位にあることをフィリップスは描くのである。

また、この “An Answer to another perswading a Lady to Marriage” は、前章で扱った “To the Excellent Mrs. Anne Owen, upon her receiving the name of *Lucasia*, and adoption into our Society, December 28. 1651” と類似点が多い。ルーケイシアも Lady も太陽を超越する存在であり、男性の力で「留める、固定させる」 (“fix”) ことはできず、「閉じ込める」 (“confine”) こともできない。そしてどちらも神性 (Divinity or Deity) を備えた人物である。Lady の正体は不明であるが、この二つの詩における類似点に鑑みて Lady はルーケイシアであると推測される。そして史実からもその根拠を見出すことができる。フィリップスには以前、友愛会で親密にしていた人物との友情がその友人の結婚を機に壊れた経験があり、結婚は友愛会における女性同士の友情の障害になると考えていた。その経験の後にオーウェン夫人であるルーケイシアと親しくなったが、ルーケイシアつまりアン・オーウェン (Mrs. Anne Owen) は 1655 年に夫ジョン (John Owen) を亡くして未亡人となる。7 年後の 1662 年に再婚するまで、若く美しく裕福な未亡人ルーケイシアには多くの求婚者がいた。その一人がフィリップスの親しい友人で、友愛会において彼女からポリアーカス (Poliarchus) という名を授けられたチャールズ・コ

ットレル卿 (Sir Charles Cotterell) である。

最終的に 1662 年にルーケイシアはマーカス・トレヴァー大佐 (Col. Marcus Trevor) と再婚を果たすが、フィリップス自身は友愛会の一員であり、結婚してもルーケイシアの活動を支援すると見込まれるコットレル卿とルーケイシアの結婚を強く望んでいたようである (Souers 4-5, 36, 124-29)。Lady の求婚者の “bold Youth” (1) については、ルーケイシアの再婚相手トレヴァーはコットレルより 3 歳しか若くない上にフィリップスよりも 14 歳年長なのでトレヴァーに向けた詩とは考えにくいかもしれない。しかし Lady については、“An Answer to another perswading a Lady to Marriage” とルーケイシア詩群との比較から導き出された太陽のイメージや用いられる語句の類似、さらには史実的根拠からもルーケイシアである可能性が非常に高いと言えるだろう⁽¹⁴⁾。

6. 終わりに

ダンの *Songs and Sonnets* の恋愛詩で描かれる太陽のイメージの三つの特徴－「太陽の地位低下」, 「侵入者・監視者として人間を支配する太陽」, 「閉じ込められない太陽」－とその逆説性を、フィリップスがルーケイシア詩群において女性同士の友情を描くために、そしてルーケイシアを称揚するために巧妙な手法で利用していること、これらの詩の分析結果からルーケイシア詩群に含まれない別の詩 “An Answer to another perswading a Lady to Marriage” においてもダンの太陽のイメージが逆説的かつ効果的に応用されていること、さらには詩に登場する Lady の正体がルーケイシアである可能性が高いことが明らかとなった。

ダンによる太陽の描写は近代科学が発展した背景と結びつけて論じられることが多い。早乙女は「新しい哲学 “new philosophy”」 (“To the Countess of Bedford” 37) に対してダンが悲観的であり、太陽への揶揄はコペルニクス的天文学への抵抗であると主張する (早乙女 24-31)。岡村は、近代科学に関心

を持ちつつも天動説に執着する 17 世紀知識人の自己撞着の表れとみなす（岡村 180）。また、川崎はダンの恋愛詩に見る意識の構造は、新しい科学がもたらした宇宙空間の急速な膨張による不安から生じた小さなものへの賛美であると主張する（川崎 126-29）。一方のフィリップスはダンが詩の中で閉じ込めようとした太陽を「閉じ込めず」（“not confine”）、太陽は自由に動くものと捉えるが、それはつまり太陽が地球の周りを動く天動説的考えの表れともとれる。しかし同時に天日取りレンズによって太陽を操作可能なものとする新しい科学を取り入れ、なおかつ太陽を超越した存在に女性を据えることによって、女性と新しい科学を結び付ける。フィリップスはダン同様に、古い概念と新しい科学が混在する時代を反映している点でダンの後継者であるが、女性および女性同士の友愛を古い概念も新しい科学をも超越する存在とみなす新たな視座を提示するのである。

注

- (1) “our Society” の語は、フィリップスの詩 “To the Excellent Mrs. Anne Owen, upon her receiving the name of *Lucasia*, and adoption into our Society, December 28. 1651” のタイトル内で用いられている。
- (2) フィリップスがダンから影響を受けている可能性については Stiebel, Loscocco “Inventing”, Scott-Baumann を参照のこと。Stiebel と Loscocco は、ダンの技法を利用することでフィリップスが同性愛を強調していると主張する。Scott-Baumann は論の一部でダンの太陽のイメージとの類似と相違を簡潔に指摘しながら、フィリップスが友情詩のためにダンの技法を利用していると主張する。
- (3) John Donne の詩はすべて *The Major Works: including Songs and Sonnets and sermons* からの引用である。
- (4) Katherine Philips の詩はすべて *Poems by the most deservedly Admired Mrs. Katherine Philips, the matchless Orinda* (1667) からの引用である。
- (5) ダンは宗教詩 “Resurrection, imperfect” において、太陽を “old sun” (1)、キリストを “A better sun” (4) と描写している。
- (6) Scott-Baumann 123 も参照のこと。
- (7) 初期近代英国女性の貞節に関する規定については、ヘンリー 8 世に仕え、後のメアリー女王の家庭教師だったファン・ルイス・ヴィヴェス (Juan Luis Vives) が『キリスト教女性の教育』(*The Institute of a Christian Woman*) の中で「貞

節と純潔、それはおまえのものではなく、おまえ自身の夫に付され、その管理にゆだねられる」と述べている (D 6)。

- (8) 女性に移り気で浮気性とみなされた根拠は、女性が精神的に弱く、墮落しやすいという当時の女性観にある。『公定説教集 (*The Second Tome of Homelyes*)』第二巻 18 “Of the state of Matrimonie” を参照。
- (9) ルーケシヤはウィリアム・カートライト (William Cartwright) の劇 *The Lady Errant* (1651) の登場人物から付けたという説もある (Rainbolt 149; DeMaria 238 n. 1)。また、1990 版では 31 行目は “So she now life, then doth light dispence,” となっている。
- (10) *OED* の “heat” n., 4.a および Stiebel 227 を参照。
- (11) 版によっては *Loves* (1710), *Love* (1990) となっている。
- (12) 「天日取りレンズ」は紀元前 3 世紀にアルキメデスがシラクサの戦いで用いた反射鏡, 「アルキメデスの熱光線」と呼ばれる道具として有名である。レンズの元となるガラス製造はエジプト, ペルシアを経由して 16 世紀にはベネチアで盛んに行われるようになり, ケプラーやガリレオが用いたレンズや望遠鏡の発展や実用へと繋がり, 天日取りレンズ (burning-glass) もその一つとして実用化されていった。鏡については Grabes, ガラス製造については Godfrey を参照のこと。*OED* における “burning-glass” の初出は 1570 年 John Dee によるものである。
- (13) スコット＝バウマンもダンの “The Sun Rising” とフィリップスの “To the Excellent Mrs. Anne Owen” における “contract” の語の共通性を指摘するが, 考察がこの二つの詩に留まることと, フィリップスの愛する人 (Lucasia) を太陽と同一視する点で本論と大きく異なる (Scott-Baumann 123-24)。
- (14) *The Collected Works of Katherine Philips: Matchless Orinda* (1990) の編者 Patrick Thomas は注釈において, フィリップスがアン・オーウェンとトレヴァーの結婚に反対する目的でこの詩を書いたかもしれないと推測するが, その根拠を示していない (Philips 387)。また, Moody もこの詩を 1660 年頃の作とした上で Lady はルーケシヤ, bold Youth はトレヴァーであると主張するが, その根拠を一切示していない。

Works Cited

- DeMaria, Robert, Jr., ed. *British Literature 1640-1789: An Anthology*, Fourth Edition. Wiley Blackwell, 2016.
- Donne, John. *The Complete Poems of John Donne: Epigrams, Verse Letters to Friends, Love-Lyrics, Love-Elegies, Satire, Religion Poems, Wedding Celebrations, Verse Epistles to Patronesses, Commemorations and Anniversaries*. Ed.

- Robin Robbins. Routledge, 2013.
- . *The Major Works : including Songs and Sonnets and sermons*. Ed. John Carey. Oxford UP, 2008.
- Godfrey, Eleanor S. *The Development of English Glassmaking 1560-1640*. U of North Carolina P, 1975.
- Grabes, Herbert. *The Mutable Glass : Mirror-imagery in titles and texts of the Middle Ages and the English Renaissance*. Trans. Gordon Collier. 1982. Cambridge UP, 2009.
- Hobby, Elaine. *Virtue of Necessity : English Women’s Writing 1649-88*. U of Michigan P, 1989.
- Loscocco, Paula. “Introductory Note.” *Katherine Philips (1631/2-1664)*. ix-xx.
- . “Inventing the English Sappho : Katherine Philips’s Donnean Poetry.” *The Noble Flame of Katherine Philips : A Poetic of Culture, Politics, and Friendship*. Ed. David L. Orvis and Ryan Singh Paul. Duquesne UP, 2015. 153-86.
- Moody, Ellen. “Orinda, Rosania, Lucasia *et aliae* : Towards a New Edition of the Works of Katherine Philips.” *The Poetry of Katherine Fowler Philips, once known as “The Matchless Orinda.”* Web. Jul. 24, 2016.
 〈<http://www.jimandellen.org/orinda.ordering.poems.html>〉.
- Oxford English Dictionary Online*.
- Philips, Katherine. *Katherine Philips (1631/2-1664) : Printed Letters 1697-1729*. Series II, Part 3, Volume 3 (The Early Modern Englishwoman : A Facsimile Library of Essential Works). 2007. Routledge, 2016.
- . *Poems by the most deservedly Admired Mrs. Katherine Philips, the matchless Orinda : to which is added Monsieur Corneille’s Pompey and Horace Tragedies with several other Translations out of French*. 1667. EEBO Editions.
- . *The Collected Works of Katherine Philips : The Matchless Orinda*. Vol.1 : The Poems. Ed. Patrick Thomas. Stump Cross, 1990.
- Rainbolt, Martha.. “Women Naming Women : The Use of Sobriquets by Aphra Behn, Anne Finch, and Katherine Philips.” *Names* 50 (2002) : 133-53.
- Scott-Baumann, Elizabeth. *Forms of Engagement : Women, Poetry, and Culture 1640-1680*. Oxford UP, 2013.
- The Seconde Tome of Homelyes*. 1563.
- Souers, Philip Webster. *The Matchless Orinda*. Harvard UP, 1931.
- Stiebel, Arlene. “Subversive Sexuality : Masking the Erotic in Poems by Kather-

ine Philips and Aphra Behn.” *Renaissance Discourses of Desires*. Ed. Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth. U of Missouri P, 1993. 223-36.

Vives, Juan Luis. *A Verie Fruitfull and Pleasant Booke, called the Instruction of a Christian Woman*. 1523. Trans. Richard Hyrde. 1592.

岡村真紀子. 『パラドックスの詩人 ジョン・ダン』 英宝社. 2007.

川崎寿彦 『ダンの世界』 研究社. 1967.

早乙女忠. 『詩人と新しい哲学—ジョン・ダンを考える』 松柏社. 2000.

——文学部教授——